

いね・むぎ・だいず 2年3作 なに? なぜ?

なに?

1年で、稲・麦を栽培する「二毛作」がむずかしいせら高原では、田んぼを最大限に活用するために「**稲・麦・大豆 2年3作体系**」(2年3作)に取り組んでいます。
2年3作とは、同じ田んぼで2年に渡り**稲→麦→大豆**を栽培する農法です。



麦秋と水田



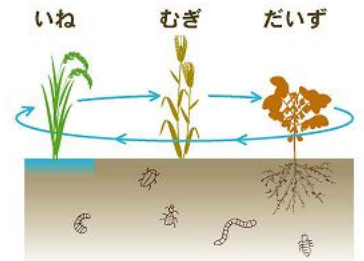
地産地消・自給率向上

コメ(稲)・麦・大豆は、私達の食生活に欠かせない基礎的な農産物です。コメは主食であり、麦は麺やパン・醤油などの原料として、また、大豆も味噌・豆腐・油などの原料として幅広く利用されています。せら高原のコメ・麦・大豆の多くは地元世羅町をはじめ、広島県内の消費者や食品加工メーカーに供給され、地産地消の推進に大きく貢献しています。しかし、**コメを除き日本で消費される大豆や麦のほとんどは海外から輸入されています。**近年、世界的な穀物需要は急増しており、2年3作などの水田の高度利用による穀物自給率の向上が求められています。



土づくり・連作障害を防ぐ

大豆は根に共生する根粒菌の働きで、空気中のチッソを肥料として利用できる他の植物にはない優れた機能をもつ作物です。しかし、同じほ場で栽培を続けると豆が小さくなり、収量が減るなどの、いわゆる「**連作障害**」が起こります。2年3作では、稲や麦のワラや根など、大量の有機物を土に返すことで、連作による障害を抑え、さらに地力を高めることができます。つまり**2年3作は土づくりを同時に行う持続的な技術**です。



担い手の育成と省力・低コスト化の推進

せら高原では、省力・低コスト化による効率のよい農業経営を行うために、集落をひとつの農場とする**集落型農業法人**や、大規模な農業経営を行う**認定農業者**などの担い手育成を目指しています。これらの担い手では、大型の農業機械を使い、麦・大豆の**不耕起(ふこうき)栽培**や、稲の**直播(じかまき)栽培**などの省力技術の導入を進めるとともに、農機具の共同利用、JAの共同利用施設の利用などによる省力・低コスト化も図っています。

■大型機械化一貫体系

せら高原では「一集落一農場」を合言葉に、集落農場型農業生産法人(集落法人)の設立が進みました。集落みんなの力を合わせた大型経営の中で、1台600万円~1000万円という大型コンバインやトラクター・播種機などを整えることができ、中山間地域としては効率的な大型機械による一貫した作業体系が確立されました。



なぜ?

変化していく状況に応じて「**守るための革新**」が必要なんだね

多様な環境が生み出す生物多様性

田んぼは、水田・麦畑・大豆畑…とその姿を変えることで多様な環境を生み出し、そこには様々な生きものの社会(=生態系)が成り立っています。いろいろな農作物を栽培することは、生きものの豊かさ(=生物多様性)を取り戻すことにもつながっています。

■「生物多様性」とは

“いろいろな生きものが、いろいろな場所で、生きものらしく暮らしている”ことをいいます。92年の国連地球サミットで生物多様性条約が採択されたことを受け、日本では95年に生物多様性国家戦略が策定され、国民全体の課題として取り組まれています。

